

研究通信

No.52

1966.2刊

村落社会研究会
事務局東京都目黒区駒場町
東京教育大学農学部
農村社会学研究室内

今年の課題について

島崎 稔

村研大会は、一昨年・昨年とひきつづいて「むらの解体」を共通課題とし、聞くところによると、今年もその課題をおう意向が強いといふ。しかもその

大会では、実証報告のそれぞれが、具体的な問題。

地域の如何を問わず、「むらは解体していない」・「依然としてむらは残っている」という、村落研究会としては同慶にたえない確認をして終っていること。至極のびりした話である。このようないわゆるムードのなかに、昨年の大会懇親会席上、来年度のテーマに関する、一員から、ここいらでそれ

しは、「むらの解体」を今年も掲げるこに敢て反対ではない。しかし、「むらの解体」なんていうのは、まさに村落研究にとっての本質問題であり、ただまたまたあげた一村落に、地域開発とか工場誘致とかいった外圧によってどんな問題が起つたか、という個々の断片的な事実報告のみをもってはおえない、すぐれて理論的問題なのだと思う。勿論、実証をふまえた報告は基本であろう。しかし、その実証も、「むらの解体」が村落研究にとってまさに本質にかかる問題であり、すぐれて理論的な問題なのだ、という認識が前提されていてほしい。そこで、わたくしは、「むらの解体」という課題の整理の意味でも、今年は、その課題に関する具体的な報告を通して、村落・農村研究の方法論的な相互検討をめざすよう提案したい。そのなかから、停滞を破つて、村落・農村研究の次の大きな課題への展望もひきだされてくるだろう。

さて、数年前まで村落研究会にとっても主要なテーマは「村落共同体の存在形態」であった。「(村落)共同体」の概念がまさに理論的立場の相違(決して経済学と社会学との学問分野の相違ではない)

から決着がつけられないまま、現実の村落・農村をめぐる急激な変化を反映して、「むらの解体」に課題が移されていったようと思われる。しかも、「共同体」の概念を敬して遠ざける空気が研究会の一部に感じられる。「共同体」の問題となるべく避けて、「むらの解体」が論じられるかのように。奇妙な話である。わたくしは、「むらの解体」が「村落共同体」の解体を意味することは殆んど自明のことであつて、問題は、遺制としてあれ、「村落共同体」が終局的な解体にまで至らずに存在しているとしたら、その存在様態・根拠・そのなかで現実の部落がなお残す共同体的性格の果してゐる機能、を検討していくことであり、更には、終局的な解体過程のうちに、一定の階級的な支配関係「権力の規定」のなかで、いかなる次の段階の「社会関係」への移行が原理的に見とうしするのか、ということであろうと思う。

「村落共同体」はいうまでもなく、「土地」を物質的基礎とする「社会関係」は一定（資本制以前）の歴史的段階的性格をもつた「土地所有」に制約された直接生産者が相互にとりむすぶ「生産関係」に外ならない。したがって、「土地所有」が封建的、さら

に半封建的・地主的に、「地主的・土地所有」がさらに日本においては段階的に性格を異にして、たちあらわれてくるのに対応して、直接生産者の相互關係も異つて「村落共同体」はその都度権力によって再編されてきた。その歴史的段階的に異つた「村落共同体」の存在形態を通じて、終局的な段階にいたる以前の「むらの解体」過程を整理することも課題として設定されえよう。ところで、次の段階・農地改革後の「土地所有」の性格であるが、これについては、かつて「変革期における地代範疇」として論じられたところであり、その規定のもとに再編された「村落共同体」の性格については、わたくしもこれまでしばしば論じてきたので繰返し記述することは避けたい。特に三〇年前後の一応の生産力構造の再編過程とそれ以降の農民層分離の展開如何が問題とされることはいうまでもない。それが現時点においては、零細地片の私的所有の矛盾のうちに、雇用労働依存の富農經營の解体、圧倒的な貢農化・農村プロレタリア化として示される。しかし、一方に、基本的な農業地帯においては、中型トラクターの導入を契機に上層農を主体として新たな労働力編成がみられる。庄内地方におけるその

稻作集団栽培・農事組合法人の組織化等の動向が注視されるが、それは多く「部落ぐるみ」の形態をとっている。他方同時に、その上層農をすらまきこむほどの勢いで全国的に人夫・日雇・出稼ぎへの就労が進んでいる。それは一九六五年中間センサスの結果がことの重大さを何よりも雄辯に示している。このような分解の現局面のなかでわれわれは、「むらの解体」の問題設定を明らかにしていかなければならぬ。現日本資本主義の矛盾の総体のなかでの、零細地片の私的「所有」と「労働」との矛盾が、「社会關係」にいかに反映されるのか。「農村労働組合全国連合会」は、運動方針に「部落の民主化のたたかい」として、次のことを指摘している。「同じ人間としての民主的権利を要求し、税金や寄付の強制とりたて、部落費の不合理な割当、部落有財産の非民主的な管理・部落所有林や耕地組合の農道堰堀りの義務人夫制、富農のための共同植などに反対するたたかいは、すでに組合のつくられたところでははじまっています」と。

わたくしはかつて読んだ福島正夫氏の「人民公社の研究」（御茶の水書房刊）を最近繰返し読みなお

してみた。そこには、農民の「保守性の基礎を培うものは、小所有者的性向と歴代支配者の支配に対する抜きがたい不信だつた」ことが指摘され、解放後特に「互助組」から「合作社」へ、遂に「人民公社化」へと、「土地」への私的所有意識の克服をもつて組織を自ら再編してゆく過程が感動的にえがきだされている。われわれは「むらの解体」の共同研究を経て、もうそろそろ研究テーマへのかかる展望をもっていいのではないかと思う。

今年の研究課題への理論的提起を、という注文に応じきれないままに漫然と筆を進めてしまったが、単に現状分析の分野に限らず、歴史的にも、今後とも、一応の自分ながらの感想としては課題について触れたつもりである。

(一九六六・二・七 島崎 稔)



村落拡大委員会報告

昭和四十一年度第一回拡大委員会を昨年末十二月二十日、東京教育大学農学部第二会議室にて開催いたしました。出席者は有賀喜左衛門、小池基之、中野卓、島崎穎、米地実、事務局・竜野四郎、民秋言。議事は、四十一年度年報編集の件、共通課題の件、その他など。

当会において決定された事項は左の通りです。

(A) 四十一年度年報（「村落社会研究」第二集）の

(1) 「研究動向」執筆（依頼）予定者（原稿枚数

十枚）

経済学	常盤	政治
経済史学	島田	
社会学	川越	隆
法社会学	磯野	淳二
民俗学	宮本	誠一
	常	一

(2) 「論点」（過去二回の大会の問題点などを論点として）執筆（依頼）予定者

第十二回大会（三十九年度）

島崎 穎

第十三回大会（四十年度）

中野 卓

(3) その他の原稿も含めて原稿〆切日は五月未日とする。

(B) 四十一年度の大会共通課題については、事務局よりアンケートを会員に出してその結果に基いて拡大委で決定する。

「お願い」

昨年中に執筆された論文の寄贈依頼（年報・第二集に社会学の「動向」を執筆予定のため）が、愛知大の川越淳二氏よりありました。会員諸氏の御協力をお願ひ致します。

尚、送り先は「豊橋市八町通五一一二四 川越淳二」です。

「昭和四十一年度村研大会、共通課題等に関するアンケート集計報告」

昨年末の拡大委員会の決定通り、会員各位にアンケートを御依頼しましたが、二月二十日現在八十五通余の解答を得ました。

周知の如く①共通課題として「村の解体」を継続することに対する御意見、②研究中（又は予定）のテーマなどの内容でしたが、共通課題に関しては、「本年度も継続を可とする」が大多数を占めています。

しかし、その意見をもつ方々の大半が「「村とは何か」の各専門分野からの概念規定」「解体のもつ意味内容の明確化」の必要、すなわち、「全ゆる面での「視点」をはっきりさせることが大切だ」との「注」が付してありました。

尚、共通課題の最終決定は、右のアンケートの集計をもとに次回拡大委員会で行われる予定です。

「研究テーマ（現在並びに予定）一覧表」

田口正己（立正大）町村合併と政治活動

川越淳二（愛知大）志摩漁村の研究
松浦孝作（東学大）共同体変容による病理現象（殊に青少年非行）

中野 卓（東教大）1. 能登及び佐渡の定置網漁村の集中的長期調査による社会変化の研究
2. 一九六四年までの社会学的人類学的な日本社会の研究の文献目録の作成

岩本由輝（東北大）三陸地方の漁村構造

福武 直（東大）町誌作成

森岡清美（東教大）農村家族の変化

池田義祐（京大）農村内の近代的集団の構造分析
小池基之（慶大）「資本」が農業をとらえていく

「法則」

井森陸平（甲南大）但馬丹波農村における酒造出稼
者の調査

齊藤正二（日大）漁業社会の構造分析	有木純善（京大）1.「民有林業の発展型に関する研究」
吉沢四郎（鹿児島県立農業試験場）林業労働の研究	酒井俊二（東洋大）国際電気通信組織からみた国際社会関係の一考察
菅野正（福島大）1.農政の滲透と村落構造 2.小作争議の研究（独占）	内山政照（専研）現代社会と農民
資本主義確立期の村落構造	高野史男（愛知学大）都市近郊農村の都市化
近沢敬一（山口大）藩政末期の家族形態（山口県山陰部の戸籍簿による）	木下彰（東北大）1.「名子制度の崩壊過程の研究 2.「東北地方における青果物の流通問題」 3.「東北地方における労働力需要調査」
園田恭一（お茶の水女大）コミュニケーション論 地域社会構造	神谷力（豊知学大）明治期の農民族制について—親族の組織と機能を中心として— 1.農村人口移動の実態と農業構造改善との連関
宮本常一（武藏美大）日本民衆の歴史 離島・山村の社会経済構造の展開	野尻重雄 2.農家の後継者の問題と農村教育の問題
山岡栄市（島根大）農民の政治意識の変化	江沢繁（北学大）「へき地社会の開発計画と生活設計に関する教育実験」
林畠留（愛知学大）農村における宗教体制の変動	佐々木交賀（宮城学院女大）山村の構造変動
八木佐市（広大）村落社会の伝統性。変動性。	菅井和夫（東大）「理論社会学の構想」と「家族」
塙本哲人（東北大）水田単作農村の研究	

鈴木 広（九大）	対馬の都市と村落	喜多野清一（早大）	日本の親族組織（山梨県下の農村）
雪江美久（東北大）	農業經營の変化と農民生活構造の研究	伊藤 章（技研）	農民組織の研究
米地 実（慶大）	村落を氏神祭祀組織とその他の神仏の神祀組織との關係として把守すること	秀村選三（九大）	幕末明治期大隅農村の研究、とくに郷士の農業經營と生活慣行
綿谷赳夫（総研）	農民層分解。共同化	中島盛光（熊本博物館）	南西諸島の社会構造
君塚正義（東北農業試）	東北の農村社会と農家生活（水田地帯、畑作地帯、山林の地帶別研究）	後藤和夫（奈良女大）	「漁業村落（志摩漁村）」の構造と変動
余田博道（駒学大）	明治以後の村落の変化	島田 隆（東北大）	近世・近代東北地方の商品流通組織
神谷一夫（東教大）	農村生活あるいは農民生活の変貌	長井政太郎（山形大）	1. 檢地帳の蒐集と検地の実態の研究 2. 漁村の農村化過程
永田文夫（愛知教育大）	愛知用水と地域の変貌（資料集）	川本 彰（東大）	技術進歩と社会構造の変動、とくに地域社会に注目して
	「尾張教育研究会」として発行	佐田忠雄（常盤短大）	農村家族論
		坂井達雄（慶大）	村落における小組合について
		小山陽一（山口大）	労働組合の組織分裂をめぐる諸
			服部治則（山梨大）
			村落構造の変貌・工業団地設置と農村社会構造の変化
			森 清雄（愛知大）
			愛知県日間賀島におけるしばり産業の隆盛に伴い、労働力流出が阻止された事例に関する産業史と労働力構造の面からみた調査研究
			予定）

		問題
村武精一（都立大）	1. 琉球民俗社会の構造について 2. フィリピン種族社会の構造の研究と現地調査	
竹内利美（東北大）	年序集団体系の研究	
安原茂（成蹊大）	農村社会構造の変動	
島本彦次郎（愛知大）	1. 志摩半島漁村調査 2. 價値体系の調査研究	
山本登（大阪市大）	未解放部落、都市及び階層（村から都市へと編入されて行くプロセス）	
松本通晴（同 大）	1. 村落の社会変動に関する研究 2. 近畿郷土村落の研究	
阿部とし子（北海道保育専院）	都市の社会層についての研究（農村との関係よりすれば「農民の社会移動について」）	
飯島源次郎（北大）	農村の変貌と農業団体	
星永俊（三島大学）	近郊農村の村落構造の変動と再編成	
岩見国男（宇部中央高）	生がいと人間像の発見	
山本英治（新生生活運動協会）	地域社会の構造	
矢島武（北大）	日本の近代化について、特に農業経済的側面	
原宏（折尾高）	1. 村落の協議録についての分析 2. 祭祀組織と村落構造の実態調査	
山本博史（全国農業中央会）	1. 戦時体制下の農家の經營と部落について 2. 訪問地方の政治構念について	
木下謙治（山口女短大）	農村社会学における構造の概念について	
黒崎洲次郎（北学大）	1. 時代別・地区別の農業の經營と部落と祭祀組織について	
中村正夫（九大）	対馬部落の継続研究（付・明治末・大正・昭和の対馬郷士史家内野対琴手記の研究）	
鈴木栄太郎（東洋大）	国民社会研究中の問題として現時の国民社会の急激な繁化の過程の社会学的的理解	
島崎稔（中央大）	1. 地場産業を中心として地方中小零細企業の危機の問題 2. 中国の農業協同化運動	
菅野俊作（東北大）	「天皇制の物的基礎」としての御料村。御料牧場の経営と村の関係	
野口武徳（成城大）	南西諸島基層社会の構造と変貌	
吉井謙重郎（大阪市大）	「農山村民の移動と社会的適応課程」	
三谷鉄夫（北大）	農村市街地の構造	
阿部徳三郎（山形大）	村落構造の変化と現行地方自治	

制度及び現行農協組織の問題点

山下袈裟男（東洋大）

老人問題との関連での村落及び

中野三郎（立正大）

都市の地域社会の構造 東北農村における出稼の実態調査（特

する農家の主婦を対象として、出稼に対する態度、意識及び出稼のもたらす社会的影響について究明）

大坪省三（東教大）

道路開墾、鉄道敷設、バス路線新設など新しい交通手段の導入と当該地域社会構造（とくに権力、勢力関係との関連）

大西正美（新潟大）

宗教的村落の変貌

竜野四郎（東教大）

「農業水利慣行と村落社会構造」

民秋 言（東教大）

近世農村経済の変貌

事務局からのお願い

昨年十月五、六日、身延山で開催された第十三回

大会において村研事務局を山梨大学農学部社会学研究室から東京教育大学農学部農村社会学研究室へ移

ることが決定されましたので、昨冬事務引継ぎを終り、発足いたしましたが、何分、村研の事務は始めてのことと、不慣れでとありますので思わず御迷惑をおかけすることと存じますが、御寛容の程をお願いいたします。

去る二月中旬にお送りした共通課題に対する御意

見、個人研究についてのアンケートは予想外に多く

のお返事をいただきましてありがとうございました。

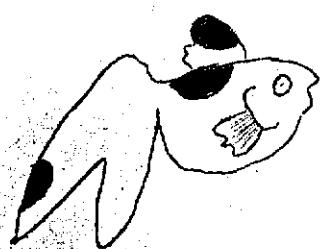
紙上をかりて御礼申しあげます。なお、会員名簿の再発行を希望する御意見が多いので、この際訂正の

上発行したいと存じます。については御住所一括欄

欄など変更された方々は三月末日までにご連絡下さい。

一方、下記の如きの欄に記入して下さい。

（1）御連絡欄（2）御連絡欄（3）御連絡欄



研究通信第五二号は大変おくれてしましました
原稿などそろえていざ発刊という時期に学年試験、

採点と大学につては年一回の「農繁期」に際会し

たため、このようにおくれました。会员諸氏に深く
お詫び申しあげるとともに、次号はこうしたことの
ないよう研究室一同自省しております。

(竜野四郎)

「村落社会研究」 第二集

原稿募集

○締切 昭和四一年五月三一日

○枚数はとくに決めませんが、掲載原稿
の取捨選択については、編集委員に御
一年いただきたく存じます。

